

平成 29 年度 第 1 回 岐阜市教育振興基本計画検討委員会 会議録

- 1 日 時 平成 29 年 6 月 7 日（水）18 時 45 分から 20 時 45 分
- 2 場 所 みんなの森 ぎふメディアコスモス（かんがえるスタジオ）
- 3 出席委員 今井委員、岡田委員、小森委員、嶋津委員、杉田委員、高木委員、長瀬委員、南出委員、吉澤委員
- 4 事務局 早川教育長、若山事務局長、原次長兼教育政策課長、石原次長兼教育立市政策審議監、石神学校教育審議監、長谷川教育政策課主幹、杉本教育政策課副主査、波賀野教育政策課主任、籠原教育政策課主任主事
- 5 議事日程
 - (1) 開会
 - (2) 教育長あいさつ
 - (3) 委員紹介
 - (4) 委員長・副委員長の選任
 - (5) 事務局説明①
 - (6) 委員発言・議論①
 - (7) 事務局説明②
 - (8) 委員発言・議論②
 - (9) 閉会

6 議事経過

（18 時 45 分開会）

○原次長兼教育政策課長 それでは定刻となりましたので、ただ今から第 1 回岐阜市教育振興基本計画検討委員会を開催します。本日の会議は公開で行います。傍聴者は、いらっしやいません。それでは、教育長の早川三根夫から、ごあいさつ申し上げます。

○早川教育長 こんばんは。夜のお時間に、雨が降る中でお集まりいただきありがとうございます。

この会議は、岐阜市の教育振興基本計画を策定するために、元となる案をいただく会議です。教育振興基本計画は、向こう 10 年間で推測しながら、その中の 5 年間について、子どもや市民の皆様はどういった教育や生涯学習を提供していくことが望ましいかを定めており、諸政策を推進するための大いなる元となるものです。

教育基本法において教育振興基本計画の国版をつくることになっていますが、都道府県や市町村はそれを参酌し、地域の実情に応じ計画を定めることが努力義務とされています。岐阜市は来年の 4 月から第 3 期となり、国も同様です。県や他の市町村は、国の動向を見た上で計画を作っていくということですが、岐阜市はそういう意味ではトップランナーとなりますので、どんな教育振興基本計画をつくっていくのか、注目度が高いものになりま

す。皆様の英知をいただきながら、全国に先駆けて、地方公共団体としての教育のスキームや施策などを創り上げていきたいと思っております。私どもの優秀なスタッフが上手にまとめ上げていきますので、よろしくお願いいたします。

内容のことを申し上げますと、国においては国力ということが最も重要なことですが、国力とは、一人一人の生産量×労働人口であり、一人一人の生産量とは、子どもにどんな教育をするかによって、かれらの持っている才能を最大限に発揮することができるかということだと思えます。一人一人の個人においては、生きる喜びを感じながら、最大限に自分のよさを活かして社会に貢献していくかだろうと思えます。岐阜市として、どういう教育をしていくか、そして、岐阜市の持っている施設をどう活用していくか、さらにどういう施設をつくるかということもあるかもしれませんが、一人一人の子どもの可能性を最大限に伸ばしていくためにどうしたらよいかというご意見をいただきたいと思えます。

教育の現場で関係がある方もお見えになりますし、産業界や法曹界、医学界等いろいろな分野の方がお見えになりますので、是非、様々な視点から自由闊達にご意見をいただき、教育の方向を決めていくアイデアをいただきたいと思えます。ここで多面的な論議がされないと、非常に一面的なものになってしまいます。この会議で「こんなことを言っているのだろうか」ということは是非言っていただき、多面的で重厚な計画を立てていけたらと思っております。

今後、今日を含めて4回の会議がございます。皆様、お忙しい方ばかりなので、全員が揃うことはなかなか難しかったようですが、最大公約数の人数で開催し、ご欠席の方には担当からご説明申し上げ、ご意見をいただくという形にさせていただきます。大変期待申し上げますので、自分の関わること、関わらないこと、骨格的なこと、部分的なこと、すべて織り交ぜていただいて是非よろしくお願いいたします。

○原次長兼教育政策課長（委員紹介）

○原次長兼教育政策課長 続きまして、「4. 委員長・副委員長の選任」に移ります。記載のとおり、委員長・副委員長の選任は委員の互選によって定められております。恐縮ですが、事務局からご提案申し上げご審議いただくこととしてよろしいでしょうか。

（異議なしと声あり）

○原次長兼教育政策課長 それでは、委員長に今井委員を、副委員長に長瀬委員をご提案申し上げますが、いかがでしょうか。

（異議なしと声あり）

○**原次長兼教育政策課長** ありがとうございます。それでは、ここからの進行は今井委員長をお願いします。

○**今井委員長** 委員長に選出いただいた今井と申します。これから皆さんと一緒に立てていく岐阜市教育振興基本計画は、これから社会システムが変わって、おそらくその社会システムを形成していくであろう子どもたちのものです。これから皆さんと、いろいろな知恵を一緒につなぎ合わせ良いものが作れたらと考えています。それでは、事務局からご説明をお願いします。

○**原次長兼教育政策課長**（事務局説明①）

○**今井委員長** 事務局から挨拶も兼ねてということでしたので、まず冒頭であいさつをいただき、その後、それぞれご発言をお願いしたいと思います。

資料2のスライド3「ご議論いただきたいこと①」で5項目上がっています。「次期計画の前提となる時代認識」、「AI等の技術革新が社会に及ぼす影響」、「現在の岐阜市の教育に関する認識」、「岐阜市が教育について掲げる理念や方向性」、「岐阜市の教育施策への期待」です。これからの議論は、このうち下2つの項目「岐阜市が教育について掲げる理念や方向性」、「岐阜市の教育施策への期待」に関してご発言いただこうと思います。必ずしも上3つの項目を無視していいわけではなく、方向性や期待を話されるときに、こちらのバックグラウンドとなる3つの項目が触れられると思いますので、そちらの方も頭の片隅におきながらご発言いただければと考えています。後半の議論に多くの時間を割きたいので、ここでは、お一人分ずつのご発言をお願いします。では、名簿順に岡田委員からよろしくをお願いします。

○**岡田委員** こんにちは。岐阜市立厚見中学校の校長の岡田と申します。私は、この春に13年ぶりに元いた学校に戻りました。

岐阜市は様々な教育資源がありますので、校長として、いろいろな意味で選択肢があるということは学校運営上ありがたいです。「これをしなさい」ではなく、「自由に使っていよ」ということで、先ほど出てきたアゴラのように自由に発言できるワークスペースも使っています。タブレットは準備に時間がかかるのですが、教科学習では当たり前タブレットや電子黒板を使っています。ペッパーは、まだおもちゃの段階ですが、保護者の方も興味を示してくださっていますし、地域の方も学校に来れば興味を持ってくれます。そういう意味では、先進的なことをさせていただけるのは非常にありがたいです。

子どもたちはとてもよい子たちですが、何か物足りないと感じています。私が気になっているのは、教育委員会の諮問文にある「心と体の健やかな成長」という点でバランスが悪い子どもが多いという点です。今年度も1年生が入学してきましたが、運動系の部活を

さけてパソコン部に大勢入っています。パソコンが好きだからではなく、運動部を避けるために入っているようです。クラブチームなどに入っている一部の子どもたちと、そうでない子どもたちの二極化になることは分かりますが、中心となる平均的なメンバーの身体的能力が非常に落ちている感じがします。例えば組立体操でも、逆立ちをただで骨折してしまう実態があります。

○早川教育長 昨年度まで小学校の校長をされていましたが、その実感は、小学校の校長だったときとつながりますか。

○岡田委員 つながります。小学校のときも体を鍛えることを意図的にプログラムの中に入れました。組立体操も敢えて行いました。今、非常に気になっているところです。

英語や ICT 等の新しいものを入れることはよいのですが、それらはあくまでツールでしかありません。自分のことや日本の文化、歴史のことを話せるなど、その根幹となる感性や基本的な知識などをしっかりと身に付けさせなければいけないと強く感じています。

○今井委員長 小森委員をお願いします。

○小森委員 こんばんは。私は、岐阜県弁護士会からの推薦でこの会議に参りました。弁護士としての経験はまだ15年ほどですが、業務の傍ら、ライフワークとして法教育に携わっています。ここ数年、岐阜県弁護士会の法教育に関する責任者を務めている関係で、ここにお招きいただいたのだらうと思っています。また、子どもの小学校のPTAの役員をここ2年ほど務めさせていただいていますので、弁護士8割、親2割ぐらいの意見になるかもしれませんが、よろしくお願いします。

まず、理念と方向性について申し上げます。最近感じているのは、英語や先ほどのプログラミングやICTなどの話もありますが、何が問題でトラブルが生じているかと考えると、情報を使いこなせていないのではないかと感じています。情報があまりに氾濫しすぎているので、簡単に結論に飛びついてしまうのではないのでしょうか。

いわゆる情報リテラシーやメディアリテラシーの抑えがないまま、我々親世代はIT化されてしまいました。例えば、スマートフォンで検索した情報について、それが正しいと思う根拠をまずは問うべきなのに、それを正しいものとして理屈を積み上げてしまうと、途中で認識の相違があったり、論理の飛躍があったりトラブルになってしまう可能性があります。それでは、思うような成長が遂げられません。情報の取扱い方等の情報リテラシー教育があって、初めて情報を使いこなす力が積み上がるのだと思います。

もう一点、岐阜市の広報誌等を見ると「岐阜からノーベル賞を」という標語があるのですが、個人的にはそこにこだわらなくてよいのではと思っています。ノーベル賞を取るような人は常識にとらわれない個性や考え方をもちの人が多くいると思いますので、ノーベル

賞受賞者は計画的に生み出されるというより、突発的に現われるものだと思います。公教育を「誰でもいつでもどこでも」といった意味で考えると、ノーベル賞受賞者を計画的に輩出しようとするような教育は資源をうまく使えていない可能性があるのではないかと思います。むしろ、ノーベル賞を取れたという結果よりプロセスの方が大切です。子どもがそのプロセスを尽くしたことは、仮に結果がついてこなくても子どもの自信になって、次の目標に向かったり人生を豊かに幸せに過ごしたりしていけることに繋がるのではないかと思います。

○**今井委員長** それでは、嶋津委員お願いします。

○**嶋津委員** 岐阜市の PTA 連合会から参加させていただいています。非常に緊張していますが、母親という立場で参加させていただければ大変ありがたいと思います。

この間、娘が北朝鮮による弾道ミサイル発射のニュースを見ていて、「私が生きている間に戦争になるかな」と聞かれました。とても悲しいことだと思って聞いていたのですが、その時に、「そうかもしれないね」としか言えませんでした。本当は、娘をそういうことに巻き込みたくないし、私が生きてきた中ではそういうことが起きていないので、子どもにもそういう思いはさせたくないと思います。しかし、世界の状況をニュースで見ていると、いろいろな悲しいことがたくさんありますので、戦争などに巻き込ませたくなくても、ひょっとしたら巻き込まれていくかもしれないと思っていて、いつ何が起こるか分からない時代に、自分で考えて自分で生活していける子どもに育てたいということが親の想いです。

私は昭和生まれで、田舎で育ってきたので、「となりのトトロ」の世界のようなおばあちゃんが出て畑があってという環境でしたが、今の子どもたちは、田舎であっても都市であっても情報化社会の中にあり、私たちが育ってきた頃とは全然違う価値観で育っているのではないかと強く感じます。

例えば、公共の場に子どもを連れて行った時、子どもを大人しくさせるために昔は子どもをひざにおいてあやしていましたが、今はスマートフォンにおもいをさせていることが非常に多いです。スマートフォンの体への影響はどうか、どういう価値観の子どもになるのか私には想像が付きません。どうしたらよいか分からなくて不安な状況ですので、子どもたちの状況をしっかりと把握してもらった上での教育ができればいいなと思います。

最近、テレビ番組で「3歳児ぐらいまでが優しさを学べる時」ということを言っていて、「どこまで本当かな」と思って聞いていました。昔言った「三つ子の魂百まで」は、もう一回言われることがあるのかもしれないと思ったりしています。子どもたちが元気に夢を持つことも大切ですが、そうなるための子どもの基盤が重要ですので、子どもたちがどういう状態なのかを研究してほしいと思います。

○**今井委員長** いろいろなキーワードが出てきたと思います。それでは、杉田委員お願い

いたします。

○杉田委員 精神科の医者です。今は、岐阜県の特別支援教育の専門委員を何年かしています。その前は、県の人権懇話会の委員をしておりました。その関係で、今は岐阜いのちの電話協会の理事長もしています。

私の家は小学校の前にありますが、そこの小学生たちは朝出会っても挨拶しません。校長に「学校の中だとみんな挨拶するけど、外で会うと挨拶しないのはなぜか」と聞いたことがあります。家前の電柱にも「知らない人にはついていかないようにしましょう」とあります。それに目くじらをたてるのがよいのかどうかは分かりませんが。しかし、特別支援教育の関係でどこかの小学校に行くと、そこの子どもたちは元気に挨拶してくれます。特に特別支援学級の子供たちは、とても楽しく挨拶してくれます。掃除の時間に行くと、バケツに手をつつこんで濡れた手で握手してくれようとしています。握手するといろいろとつきあってくれます。

あと、発達に問題があると周りから見られた小学生や中学生、高校生が、周辺に見てくるところがないので、私のクリニックに来ます。そういう子どもたちは、発達に問題があるのではなく、発達に特徴があるのだと思います。学校の先生が相談に来たときには、「この子どもにはこういう特徴があるから、ここにもっとスポットを当てたらどうですか」と話をするのですが、「みんなひとまとめにして同じ方向を向かせないと教育じゃない」という傾向があり、そのあたりをどう変えていくかを議論できたらよいと思います。

それ以外には、保育園や幼稚園の段階から「人を大事にする」ということをもって前面に出してやっていただくと、小学校に入ってから学級に行けなくて相談室にいるという子どもが多少減るのではないかと思います。

○今井委員長 それでは、高木委員お願いします。

○高木委員 岐阜県立岐阜北高等学校の校長をしています高木と申します。この4月から岐阜北高等学校に着任しましたので、まだ自分の学校のこともよく分かっていないところがあります。

校長の経験としては2校目ですが、今から20年ぐらい前、私が担任をしていた頃の生徒の様子と現在の高校生を比べると、特に岐阜北高等学校の生徒を見ているとそう思うのかも知れませんが、全般的に今の高校生は、規範意識は高くなっているなと思います。まじめな生徒が多いです。特に岐阜北高等学校の生徒だと、スマートな生徒が多いという印象を持っています。

ただ一方で、ちょっと打たれ弱い面があると思います。本校で2か月ぐらい過ごしておりますが、勉強などで少し躓いたりすると、それが原因で自信を失う生徒もいます。そういう点では、生徒を見る尺度が、どうしても勉強や学力という視点になりがちなのかと思

います。「へこたれない生徒をつくるにはどうしたらよいか」というある調査では、「いろいろな体験をしている生徒は自己肯定感が強い」という結果が出ています。そういう点では、もっといろいろな経験をさせていかななくてはならないのかなと思います。

また、高校教育の立場から非常に興味関心があることは高大接続改革です。その中でも、大学入試センター試験のことで。現在はすべてマークシート式での回答ですが、記述式の試験を導入していくことや、英語の4技能を測るために、民間の資格試験を利用していくことが検討されています。平成32年度から実施されるとなりますと、直近に迫ってきている問題です。

岐阜市の教育については、高校の側から見ても、例えば、ICTの関係や4技能に対応する英語教育などが熱心に行われていると思いますが、今後、我々が高大の接続で課題に思っていることであるならば、進路指導のあり方も含めて、中高の接続も考えていく必要があると思います。先ほどの英語の4技能を測る点で言うと、民間の資格試験を使うということですので、このような考え方は中学校でどのように捉えていけるのかということがあります。都市部では当たり前の環境かもしれませんが、地方で考えたときに、こういった資格試験を受けられる環境にあるのかどうか。中学校のときは、資格試験に対してどのような捉え方をしているのかについて、中高接続の中で気になるなと思っています。私は、高校を代表してということですので、高校の側からいろいろな意見を言わせていただければと思います。

○早川教育長 ちなみに、前職は岐阜県教育委員会の教育次長でした。

○今井委員長 長瀬委員よろしくお願ひします。

○長瀬委員 株式会社ナガセインテグレックスの長瀬と申します。よろしくお願ひいたします。

まず、以前に岐阜市教育創造会議に出させていただき、岐阜市の皆さん、教育委員会の皆さん、学校に日頃携わっていらっしゃる方が、こんなにも真剣に熱心に議論され、いろいろな施策を行っているということ、その会議に出させていただくまで存じ上げませんでした。私は61歳で、息子が33歳で所帯をもって子どももいますが、彼が巣立つとき、ほとんど仕事ばかりしていましたので、学校教育について本当に考えたことがありませんでした。それがこういう形で、皆さんのご意見を伺ったり意見を出したりさせていただく機会を得て感謝申し上げますし、微力ですがお役に立てればと思っています。

最近、日常生活や、会社で若い社員と話していて、個と社会の折り合いというかバランス感覚が、自分たちが育ってきたころといい悪いではなく違うなと感じることがあります。今は国レベルでも、例えば、都行政でも〇〇ファーストということが打ち出され、それを是とする風潮があります。それはなぜかという、あまりにもありとあらゆる価値観がOK

となっているからではないでしょうか。それはいいのですが、一番根っことなる部分、みんな共通の価値観として持たないといけない部分が共有されていないと、理屈で話し合ったり、こうしないといけないのではないかと言ったりしても話が進まないと思います。「人に迷惑をかけなければいいのではないか」と言われますが、それは一体どういうことなのか、時おり、非常に居心地が悪いなという感じがします。例えば、教育の理念や方向性という部分で、グローバルな人材を育てる等様々あると思いますが、一番根っここのところについて、学校に子どもを預ける保護者の方と、教育行政をされている皆さんとが本当に合っているのでしょうか。そこが合っていなければ、様々な施策を出しても、どこかで破綻するような気がします。

幸い、私の会社に、高学歴で偏差値が非常に高い学校の方が来ていただけるようになりました。頭は非常にいいのですが、心が非常に弱いのです。実務をやってもらえるとすごくできるのですが、何かあるとすごくへこたれてしまって、こちらが気を遣わないといけない感じです。何なのかと考えると、心と体のバランスが大切で、心身ともに強い人材を育てていただきたいと思っています。心身ともに強いとは何かというと、対応力ではないかと思っています。今、ここで非常に卓越した皆さんが「10年後はこうなるだろう、5年後はこうなるだろう」と想像されても、そうなるかどうかは結局分かりません。外れたらどうするという話ではなく、どうい変化が起きようと、その変化をしっかりと感じ、分析し、自ら対応していける力を養わないと心身ともに強い人材にはならないと思います。ですから私は、変化に対応できて自ら立ち向かう人材を育てていただくためにも、一番根っここのこれだけは共有しなければならぬという価値観が何かということは是非決めて、すべての方々が共有できればと思います。

○今井委員長 南出委員、よろしくお願いします。

○南出委員 この場所はいいですね。後ろに高校生に囲まれて、ある種のプレッシャーを感じるオープンな場所です。この壁が取り払われて一緒に議論できたら更に良いと思います。

私は、教育をベースにしながら生活空間の中での育ちや学びを追いかけています。大人の青年期、大人の若者あたりをメインに研究していますが、あくまで教育ということを考えています。今回の最初の話でいくと、学力は高いが意欲が低いということが真摯な課題だと思っています。それと重なるとは思いますが、諮問文の「審議に際しての留意事項」の3番目にある目標・指標に関わって簡単に説明したいと思います。

先ほど子どもたちの10年後という話がありましたが、そもそも教育を語るのは本当に難しいです。一般行政は「今の社会をどうするか」となりますが、教育は「少し先の社会、数年後の社会を見据えつつ、今の子どもたちに向き合う」という高度でかなり専門的な営みです。

教育ではありませんが、成果を求められる圧力が強く、そのプレッシャーが逆に「こんなことをしてみたい」ということを弱らせてしまう側面があるのではないかと思います。これは日本だけでなく実は世界でも問題になっていて、PISA の学力調査が世界的に有名になっていますが、これに対する批判を世界の名だたる教育学者たちが一斉に出しています。調査が教育の競争化を押し進めてしまい、手段が目的になってしまう。本来、テストはよりよい授業をするためにありますが、逆にテストのための授業になってしまう。そういう転倒をどう超えていくのかが重要です。

先ほど教育長が仰ったように「教育は、可能性をいかに広げていくのか」であり、結果を保証するものとは少し異なります。個の可能性を広げていくために教育はありますが、これを目の前の成果として捉えていくと見えなくなっていくものがあると思います。

○今井委員長 最後に、吉澤委員お願いします。

○吉澤委員 岐阜大学教育学部の吉澤と申します。委員名簿の備考に「コミュニティ・スクール研究他」とありますが、もともと私の関心は子どもの社会性です。今、委員の皆さまがいろいろな表現で発言されていた中で、例えば「ものごとに負けない力」、「粘り強く物事に取組む力」、「多様性に柔軟に対応する能力」、この辺りは知的能力である IQ と違い、EQ（心の知能指数：Emotional Intelligence Quotient）と関わる面があります。その EQ に関わる面が、子どもを取り巻く周りの他者の影響を受けてどのように高まっていくかという研究をしていました。

岐阜市では、全小中・特別支援学校がコミュニティ・スクールに指定されています。コミュニティ・スクールとは、ある意味、子どもを取り巻く周りの社会化の担い手たちが一同に会して、どういうふう子どもたちをある一定の方向にいざなうかを議論する場だと思います。例えば、現代を取り巻く様々な問題があります。そういうものを補う意味が、周りの他者の連携にあります。例えば、AI に人間がとって代わられる、多くの仕事なくなるという話がありますが、その中でとって代われないのが人間の共感性、高次の社会的能力だと言われています。

岐阜市の問題として、夢をもつ、粘り強くものごとに取り組むという側面が他県に比べて弱いとされていますが、岐阜市は社会性をどう考え、それをどのように、いろいろな役割の人たちを使って、能力を高めていこうとされているのでしょうか。岐阜市に残り地域に愛着を持って岐阜市のために活躍する人を育てたいのか、それとも国レベルで国家に貢献する人を育てたいのか、ターゲットを明確にすると効率性が高く教育の効果が上がるのではないかと思います。

戻りますと、社会性が私の専門ですので、社会性をどう意識し、教育の中に位置づけるのかというのが私の研究です。

○今井委員長 今、皆さんから様々なご意見をいただきまして、岐阜市の教育において育みたいのは、岐阜市に貢献する子どもなのか、国に貢献する子どもなのか、何をもって岐阜市の教育の成果とするのか、その設定をどこにするのかが、個々の施策に一番関係するのではないかと思います。話を伺いました。

私自身は、岐阜市を支えてくれる子どもたちを育ててくれれば、これから未来の人材も安泰になるわけで、人として脈々と続く歴史の担い手になるのが、子どもたちではないかと思えます。その子どもたちに何を期待するかは、「いろいろな状況にあっても対応できる」ということが非常に重要です。そのためには、心身ともに健康で、いろいろなことに興味があって、自分の今いるポジションの中で最大限に力を発揮できるような子がいいなと思えます。ただ、みんなポジティブではないので、そうではない子もその子なりに輝ける人生を送ることができる、そのベースを公共で培っていただけたいなと思えます。

時間が押しています。事務局として最もお聞きしたいのは、次回のたたき台の基礎となるキーワードを出していただく後半の議論となりますので、事務局の方から説明をお願いします。

○原次長兼教育政策課長（事務局説明②）

○今井委員長 ありがとうございます。それでは資料 2 の「ご議論頂きたいこと②」について皆さまからご発言をお願いします。時間が限られていますので要領よくまとめたいと思えます。あまりない会議形態だと思えますが、ホワイトボードを使ってもよろしいでしょうか。＜各委員の発言をまとめるためのホワイトボードを 3 枚用意し、事務局が示した枠組の 3 つのキーワードがそれぞれのホワイトボードに 1 つずつ描かれる＞

テンポよくご発言をお願いしていこうと思えます。よろしくをお願いします。

さて、ここからの議論は 2 点に絞って進めていきたいと思えます。先ほど事務局から提案がありましたが、様々なニーズに対して施策を検討してはどうかという点です。そのための大きな柱として柱 1・2・3 のご提案がありました。議論の 1 点目は、この柱立てでよいのかどうかという点です。例えば、更に複数の視点が必要であるとか、あるいは 3 つではなくて 2 つにした方がいいとか、柱の大枠がこれで良いのかということについてお聞きしたいと思えます。

2 点目は、それぞれの柱に対して、これから施策を考える上で何を重視していかなければならないのかについてです。例えば、先ほどご挨拶いただいた際にお話し頂いたことがどの柱に位置付けられるかであるとか、前半のご発言の中で頂いたキーワードと柱を関連付けていきたいと思えます。

本日の議論を通して様々なご意見を頂いて、次回に議論する予定のたたき台のベースを形づくっていきたくて考えていますので、よろしくをお願いします。

○杉田委員 柱立てについては、これで良いのかどうかすぐには判断できませんが、元気な子どもを育てるために、精神科の医者が暇になるような元気な子どもを育てるということをメインに、先ほど長瀬委員が仰ったような「何かあってもすぐにへこたれないような子ども」を育てるにはどうしたら良いかを考えていけると良いなあと思います。

また同じことを言いますが、私の家の前に小学校があります。学校の授業があるときはとても静かです。5月末に運動会があるので太鼓の音等が聞こえてきますが、子どもの声はあまり聞こえてきません。それが土日になるとおじさんの声に混じって元気な声がしています。野球少年団やサッカー少年団だと思います。土日にそういった子どもたちを見ると、こういうことが普段からあると良いなあと思います。発達障がいと呼ばれる子の中に運動が苦手な子が多くいますが、どのように手足を動かせば良いのが上手く身についていないのだと思います。そうしたことも教育の大事な問題だと思っています。

○南出委員 まず大枠の形式の話について、全体に関わるとも思いますが、例えば、今の「元気な子を育てたい」というのが最終的な目標としてあると思います。そこを目指して何かやろうとすると、逆の結果になってしまうこともあるのではないのでしょうか。子どもをどうにかしようとする、それが目的になってしまって、大人が「ああしろ、こうしろ」となり過ぎて、逆に子どもが受け身になってしまうかも知れません。施策の目標としては「元気な子を育てたい」ということが大人側の思いとしてあるのですが、施策として重要なことは「子どもが元気になるような機会」をどのように作るのかだと思います。これが施策の重要な部分ではないでしょうか。「子どもがどのように変わったのか」というよりは、「子どもが経験できる場がどれだけ豊かになったのか」を重視した方が良いのかなと思います。

○杉田委員 学校に行って私が一番感じることは、みんなが同じ顔をしているということです。以前、ある高等学校の学校評議員を務めたことがあります。その際に、当時の校長先生が「我が校の生徒は良い子が多いです」と言われました。学校に行ったときに高校生が掃除をしていたのですが、私が歩いていると皆が手を止めて「こんにちは」と挨拶をするのです。校長先生が「みんな挨拶するでしょう」と仰ったので、高校生ぐらいになったら「この人は誰だろう」という顔をしてこちらを見るのが普通ではないかと思ったのです。

以前、特別支援学校の先生と議論したことがあるのですが、「この子は気に入らないとかみつ。学校の先生が怪我をするから何とかしてほしい」と相談を受けました。その子は言葉が話せなくて意思表示ができないということでした。それで、どのようなときにかみつくのかを先生に聞きましたら「皆がこちらを向いているから、あなたもこちらを向きなさい」とやるとかみつくということでした。それで私は「それは先生方が考え方を改める必要があるのではないですか」と伝えました。ですから、南出先生が言われたように。

○南出委員 そちらを向きたくなる状況ですね。

○杉田委員 そうです。

○嶋津委員 質問でもいいですか。今日頂いた資料のスライド4の「様々なニーズ」ですが、事前にお渡し頂いた資料から修正がありました。その理由を教えてください。「ボリューム」、「チャレンジ」、「サポート」とあります。言葉が変わったことは理解できましたが、図が斜めになっていることには何か理由があるのでしょうか。また、矢印が加えられています。

○原次長兼教育政策課長 斜めにしたのは今井委員のご発想でして、当初、円形の図形が3つ縦に並んでいたのですが、そうすると上下の階層をイメージさせるため斜めにずらしました。

また、「サポート」から「ボリューム」に向かって出ている矢印ですが、様々な課題があっても、こぼれ落ちていかないよう上に引っ張り上げていくイメージで加えました。

また、「ボリューム」から「チャレンジ」へ向かう矢印については、「ボリューム」の枠組みの中で何らかの気づきがあって「こんなことをしたい、そのために頑張る」というイメージを出すために加えています。

○今井委員長 矢印の部分が、恐らく「岐阜市がそれぞれの子どもたちにできること」というイメージでしょうか。岡田委員、どうぞ。

○岡田委員 「チャレンジ」や「ボリューム」とありますが、「ボリューム」は経済用語、マーケティング用語というイメージが強く、「もっとも対象者が多い」つまり「大多数の平均的な人」という意味で使われているのだとは思いますが。

日本語に訳せば「分量」という意味になり、良いのであれば定着させていけばよいと思いますが、私の感覚的には良いのかどうか少し違和感があります。

それから中身についてですが、子どもたちが他者と関わるという側面が心配です。先ほどスマートフォンの話が出ましたが、先日、スマートフォンに関する新書を読んでいまして、その中で、このままいくと大変なことになるということが書いてありました。先ほどの心と体のバランスの話にも、一部ではスマートフォンが関わっていると思います。

私は、地元の地域で「ノーメディアデー」ということをやっていて関心が高いのですが、便利さの根底にある感性の部分、美しいものを見て喜んだり、興味関心で自由に行動したりといった側面をもっと大事にして、そうした経験を積んでいくことが必要だと思います。

それから、大人も人と関わるのが苦手になってきているように感じます。常に他者からの批判を気にしているところがあって、その結果、保護者が子どもの失敗を受け入れら

れなくなっているのではないのでしょうか。失敗しないように心配しすぎて、窮屈になってきていると思います。

先日、ある保育園の先生と話をしましたら、子どもたちが家族ごっこで遊ぶときに人気があるのは母親でも父親でもなくペットだということでした。何の苦労もなくみんなに可愛がられているように思うのでしょうか。大人の価値観を変えていくことが「ソーシャルキャピタル」にあたるのかも知れませんが、根底にある「何を大事にするのか」を統一していくことが必要だと思います。

○今井委員長 それは柱3にフィットしてくるのでしょうか。

○長瀬委員 よろしいですか。委員長のご質問にそのまま答えていきますと、まずは柱が3つで良いのかという点ですが、私は3つで良いと思います。このように分けて考えようという発想に賛成です。色々な子どもがいますので、画一的な教育ではなく、それぞれの個性に応じていくということで、3つというのも良いと思います。最小限、3つに分けられたのは大賛成です。

その後なのですが、理系の発想で言いますと、本当はこの図から7つが出てくるのだと思います。それを3つにされているから、ここから後の整理が大変になるかも知れません。本当は、「純粋にBの特性を持った人」、「AとBの特性を持った人」、「純粋にAの人」、「A・B・C全ての特性を持った人」、「それからAとC」、「純粋にC」、「純粋にD」と7つです。

先ほど杉田委員が仰った「何か一つの方向に向けようとするとかみつくといい子」と、いわゆる一般的な高校生の子どもについて、同じ議論をするところと分けるところを考えましようということが、この図の言わんとしていることだと思いますので、私はこの考え方に賛成です。ただ、柱を3つに分けることが後々どうかという点が気になります。キーワードは重なっていても良いと思いますが、これを3つにきれいに分けることは恐らく難しいのではないのでしょうか。

○今井委員長 公教育でやっていくメインの部分と「チャレンジ」の部分、「サポート」の部分事務局としても発信していけると良いのですが、実態も事務局の考え方も全くそうではありません。「チャレンジ」の部分のエリート教育と見られてしまう可能性があり、公教育としてすべきことなのかという議論を招きかねません。そこで、公教育へのニーズと捉えて、それに基づく柱を組み立てるといった形になっています。

○長瀬委員 そこが今の社会の難しいところかも知れません。エリート教育ではないのですが、慎重に検討していくことが求められると思います。

○今井委員長 もしかすると、先ほど杉田委員が言われたようにそれぞれの子どもにはそ

それぞれの特性があつて、それらを公としてどのように支援していくかをチャレンジの部分も含めて考えていくと、様々なニーズに沿った柱という形で進められるかも知れません。

○長瀬委員 ノーベル賞を取る人は、良い悪いは別にして「チャレンジ」なんでしょう。

○杉田委員 私は最初にこの図を見たときに、これはエリート教育ではなく「一人一人を大事にすることに繋がっていく」のだと解釈しました。

○長瀬委員 ノーベル賞を取る人というのは本当に素晴らしいことですが、どっちが上とかそういうことではありませんので、人間としての価値を取っていない人と比較しなければよいだけです。

○杉田委員 そうです。

○早川教育長 ノーベル賞は、「チャレンジ」や「サポート」ではないでしょうか。

○長瀬委員 そうですね。そこを共通の認識としたい。そこが共通であればこのまま進めても良いのではないのでしょうか。

○早川教育長 我々が最初に考えたのは、日本の教育というものが規格的な人を育てることに合っていて、「ボリューム」に対して上手に機能していたのではないかということです。チャレンジ精神があつて教員の思うとおりにいかない子どもの中に才能がある子どもがいると思うのですが、割と力がある教員ほどそれを挫いていたのではないかと思うのです。それはいけないと思います。「ボリューム」の部分は、岐阜市が将来的に良い町として、良い市民がいる町にしていくために重要でしょうし、その他にも、岐阜から出て活躍していく人がいて、外から岐阜に貢献してくれるような人がいるのではないかという単純な考え方だったのですが、もう少し複雑に捉えていっても良いような気がしています。

○長瀬委員 大変だと思いますが、その方が後々困らないのではないかという気がしています。

○高木委員 そもそもことをお聞きするのですが、柱 1・2・3 と類型化することに意味があるのでしょうか。その前段でニーズを整理していますが、それを柱 3 つにされています。特に柱 2 のまとめ方が特徴的ですが、ニーズと施策の柱立てということですから、要はマトリックスで考えようということなのでしょう。

そのときに、一つの施策が一つのニーズに対応するとは限らないのではないのでしょうか。

したがって、施策のメインの対象者は関連性が高いのですが、そうでなくとも関係がないわけではありませんから、それを考えればよいということであれば、次のページにある「3つの柱立て（案）と現行計画の関連性」に示されているように考えれば済むことではないかと考えます。あえて、柱立てで類型化することにどれだけの意味があるのかそもそもの疑問です。

○今井委員長 ニーズに基づき柱立てをしたことについて、事務局の説明はいかがでしょうか。

○原次長兼教育政策課長 現行計画は4つの柱立てをしています。今回、我々の思いとしまして「個々の特性に応じた、ニーズに応じた施策を打ち出していきたい」ということで、従来とは発想を変えました。確かに、柱2については「チャレンジ」と「サポート」がまとめられていますが、個性に着目した教育や支援として共通していると考えています。いわゆる「ボリューム」の部分とは異なって捉えられるのではないのでしょうか。

○高木委員 何を縦軸にして何を横軸にするのかということかと思えます。

○原次長兼教育政策課長 捉え方は変えましたが、柱立てに施策を位置付けていくと従来のものから大きく異ならないのかも知れません。我々としては「ニーズに応じたきめ細かい施策を実施していきたい」という思いからこのような考え方の整理をいたしました。

○今井委員長 私のイメージでは、それぞれの柱にタイトルをつけるとすると、柱1では「こんな子どもに対する教育」、「こういう教育をしたい」ということになるのかなと思います。今までは、当たり障りのない名前だったと思いますが、岐阜市を支える人材として、全ての子どもたちに「このような教育をする」というメッセージです。

チャレンジしたりサポートが必要だったりする子もいて、その子どもたちには「このような教育をする」という思いを計画の中に入れ込んでいくということが、この図と柱立てが示すイメージなのだと思います。

○南出委員 私は、ニーズそのものと柱の関係性について、現行の計画は大人側の施策のイメージで分けられていましたが、それに対してニーズは子どもたち自身の状況に則して分けたのだと理解しています。しかし、状況だけでは施策にならないので、そこに大人側の政策的な観点をに入れて集約していったものが柱なのではないのでしょうか。つまり、現行計画は大人側の目線で整理されていますが、次期計画はあくまで相手側のニーズから出発して、それを大人側が整理してまとめると柱3つになるということではないのでしょうか。

○吉澤委員 少し異なる角度からですが、ここで「ソーシャルキャピタル」が柱 3 になっています。例えば、様々なニーズを有する方がいて、それを支える背景に「ソーシャルキャピタル」があると考えた場合、柱として立てるのか、柱 1・2 の背後にあるものとして位置付けるのかの 2 通りが考えられます。

例えば、ソフトやハード両面でキャピタルになると思いますが、そこでターゲットにするのは、スポーツイベントでも柱 1 を対象にするものと、柱 2 を対象にするものがあると思いますし、例えば「ソーシャルキャピタル」を「社会的な人々の信頼や結びつき」という意味で考えた場合、それがコミュニティ・スクールという形を通じて「ボリューム」に働きかける場合と、そうではなく民生委員といった方々が「サポート」の方を支える場面として機能することがあると思います。個人的な考えとして、柱をあまり増やさない方がターゲットを明確にできるので、教育的な効果が現れやすいと思います。柱 3 が柱 1・2 の背後にあるような位置付けという捉え方もできると思います。

○今井委員 吉澤委員の発言を私なりに解釈しますと、もしかすると「チャレンジ」や「ボリューム」や「サポート」と、「ソーシャルキャピタル」は異なる次元のものであるのではないかと思います。

「チャレンジ」、「ボリューム」、「サポート」を学校教育と捉えた場合、この計画は学校教育で学んでいる子どもだけではなく、社会教育も重視する必要がありますので、そのことを示すためにこの図が出てきたのではないのでしょうか。そうすると、社会教育に関する計画でもあります。

○波賀野教育政策課主任 事務局の発想からですと、今ある施策がどのように分類できるかという視点から出発している面がありますので、「ソーシャルキャピタル」の捉え方については、様々ご議論頂ければと思っています。

○早川教育長 吉澤委員は、「ソーシャルキャピタル」と生涯学習の関連性をどのように捉えていらっしゃるのでしょうか。

○吉澤委員 「ボリューム」、「チャレンジ」、「サポート」は、学校教育を念頭に置かれているのですね。例えば、生涯学習の対象となる方も同様に分けられるのではないのでしょうか。

その背後にハード・ソフト両面での「ソーシャルキャピタル」を位置付けるという発想でも良いように思います。どちらかと言えば、柱 1・2 にはコンテンツが入ってきて、そのコンテンツを実現するためのキャピタルが背後にあって、それが施設面であり、人間の交流関係や信頼ではないのでしょうか。

○南出委員 図で示すならば、「ソーシャルキャピタル」から「ボリューム」、「チャレンジ」、「サポート」に矢印が向かうのではないのでしょうか

○今井委員長 ホワイトボードに書いてください。

○南出委員 教育委員会の施策は教育の専門家がやるというよりは、地域の方も含めて様々な方が一緒になってやることが入るような気がしています。コミュニティ・スクール等もそうです。様々な支援がそれぞれに入ってくるのではないのでしょうか。それぞれ、柱1・2の中にコミュニティ・スクールが位置付けられるでしょうし、柱2の中に子ども若者総合支援センター“エールぎふ”との連携等が入るのではないのでしょうか。

○今井委員長 同心円でしょうか。それぞれコミュニティがあり、学校があり、家庭があるということですね。コミュニティの中に大きな3つの層があり、それが立体的に有機的に繋がっているというイメージです。

○吉澤委員 ブロンフェンブレンナーですね。

○今井委員 そうですね。こうした同心円モデルはよく見られるものです。今、議論が発散していますね。

○早川教育長 宿題を頂ければと思います。

○今井委員長 今あるものが、子どもがメインの「ボリューム」、「チャレンジ」、「サポート」ですが、社会教育としての「ボリューム」、「チャレンジ」、「サポート」があるということですね。まずは学校教育と社会教育の対象を明示して、その背景に「ソーシャルキャピタル」があるのではないかとということでしょうか。そこで、どのように柱を作っていくかと考えると、学校教育だけではなく、学校教育と社会教育の両方が入る形で計画が立っていくのではないのでしょうか。社会教育として各種スポーツイベントや図書館、科学館、歴史博物館等がありますが、科学館は子どもたちの気づきや才能を伸ばすことにもつながっていると思います。ただ学校教育から外れているだけで、しかし個に応じた活動をされているので、今ある柱3の部分だけを取り出すのではなく、「ソーシャルキャピタル」によって今ある全ての施策を整理できる枠組みを作っていくことが重要ではないのでしょうか。

そこで、例えば「チャレンジ」や「サポート」の部分は、エリート教育といったものではなく、個々の事情によって躓きかけていることも個の様相であって、それをどのようにサポートしていくのかを書いていけば、エリート教育を推進しているわけではなく、それぞれの子どもの個性をどのように活かしていくのかということが整理できますし、柱1に

関しては学校教育も社会教育も同じですが、全ての子どもたちに学んでもらって臨機応変に対応できる子どもにしなければいけないといった、重要な考え方をここに盛り込んでいくことができます。この3つ目に関しては、おそらく柱1・2の境界が曖昧なのではないでしょうか。

○長谷川教育政策課主幹 少しよろしいでしょうか。人間関係を柱立てにして、その中に社会教育が入ってくるのはいささか違和感がありまして、「学校教育でも社会教育でも様々あって、それを社会の人間関係で支えていく」という発想に自分の中の理解が進んだように思います。

学校教育と社会教育というカテゴリはありますが、本人にとっては連続性がある話なので、学校教育でも社会教育でも「ボリューム」、「チャレンジ」、「サポート」という領域があり、それらが全体として人間関係を包摂しているので、それぞれについて学校教育も社会教育もあるのではないのでしょうか。

○早川教育長 吉澤先生にお聞きしたいのですが、例えば、この図を社会教育バージョンと捉えた場合、「ボリューム」はPTAや自治会です。「サポート」は民生委員だったり、「チャレンジ」は長良川大学や各種NPOや自己開発をされている方々だったりすると思います。学校教育バージョンと社会教育バージョンがあって、社会教育で活躍している方の多くは子どもたちのために自分たちの学びを使っていこうという関連性があるのだと思います。そういう捉え方をすると分かりやすいと思いますが、学問的には間違っている気もします。

○吉澤委員 今のお話で、図のそれぞれに学校教育と社会教育があるという考え方ができるわけですね。また、全体的な構想の中に子どもをターゲットにするという前提がありますが、大人でもターゲットにして良いのかなと思います。例えばシニアの学び直しや、シニアの中でもチャレンジしたい方がいらっしゃいますので、シニア全体に対して働きかけても面白いのかも知れません。ただ、そうした捉え方をしても、全てに教育委員会の施策を当てにくくと思うのですが、ヴィジョンを持つことが必要なのではないかと思います。

○今井委員長 今の発言をまとめますと、柱1・2のベースとなるのが柱3の施策で、柱3の施策というのが感性と言いますか、人と関わるEQに関係する部分で、それが大前提ということですね。そこで人間性を培う。それは子どもだけではなく、今、失われつつあり、私たちの世代が「これは違うのではないか」と思う部分ではないのでしょうか。伝統と文化の継承や活用、人との関わり、感性的な部分ですね。更に、柱1で全体的な教育施策、それは子どもに限らず大人も入ります。それで、柱2では大人も子供もチャレンジとサポートに向ける施策。そんな3つの柱で考えていくということですね。

○南出委員 よろしいでしょうか。言葉として「ボリューム」で良いのかという点です。いろいろ考えていたのですが、「チャレンジ」や「サポート」と比べて異なるのが、ごく普通の日常ということが大きいのかなと。みんなで共有できる基盤として考えると、「ありふれた」とか「日常性」という意味で「コモン」と呼ぶのが適すると思います。

○今井委員長 予定調和的な会議ではなく申し訳ありません。事務局に取りまとめ頂いて、次回の会議にてたたき台をお示し頂くということで、私たちは楽しみにしていただいております。

○岡田委員 大人の自覚を促すことはすごく大事だと思っていて、今、コミュニティ・スクールで地域に対して「こういう人はいませんか」ということを話していますが、なかなか来てもらえないと言いますか、学校のこととして見られてしまっているのかも知れません。人間関係は常にギブ&テイクなので、子どもだけが常に何かを与えてもらうという立場でなく、大人も与えてもらう存在であるべきではないでしょうか。子どもと関わることで大人も触発されますし、親や子どもでもそうだと思いますので、その部分が喚起されると良いのかなと思います。大人が人生を楽しんでいないと、子どもも夢や希望を持ちづらと思います。そこを市の施策としてやっていけると良いのかなと思います。

○今井委員長 啓発なのでお金もかかりませんね。大人がちゃんとした大人じゃないと、子供の教育をしっかりしようと思ってもできませんから、大人も子どもと一緒に学んでいかないとけません。新しい社会システムに大人も対応していく必要があるので、そうした自覚を促すスローガンを教育委員会に持っていただくと少子高齢化の中で教育立市を掲げる岐阜市としては、すごく素晴らしいことだと思います。以上で締めさせていただきます。

○原次長兼教育政策課長 ありがとうございます。今回、教育に対する様々なニーズから出発して柱を立てることについて様々なご意見を頂きました。この点については、事前に会議資料をお持ちした際に、今井委員長から、現在の社会情勢に関する危機感があるため、ある程度明確化して施策を進めていくことが必要とのご意見をお聞きしておりましたところ。本日は多くの宿題を頂いたと思っておりますので、また委員長をはじめ皆さまのお知恵をお借りしながら次回会議に向けて検討してまいります。

○若山事務局長 長時間に渡りご意見を頂き誠にありがとうございました。大人側の目線でこれまでの柱立てがされていたというご意見は、注意していかなければならない点だと実感いたしました。またご提案させていただいて、ご意見を頂戴しながら、良い計画にしていきたいと考えています。本日はありがとうございました。

(20時45分閉会)